

第17回企画展示「尾道あ・ら・かると～塩と鉄～」

尾道と塩田

商都尾道の隆盛のひとつに塩の流通があげられる。

瀬戸内地方では、瀬戸内海の干満の差や雨の少ない瀬戸内海式気候によって塩田が各地に開発された。日本随一の塩田地帯であった。

芸備地方で塩田開発が始まったのは、広島藩では、竹原古浜塩田で、1650（慶安3）年から、福山藩では、1662（寛文2）年に松永塩田の開発が手始めとなった。

竹原・松永塩田の開発は、広島藩や福山藩の主導で開発が行われたが、塩の領内消費から都市の発展に伴う需要が拡大していった。さらに、1672（寛文12）年に河村瑞賢によって開発された西廻り航路によって、塩が有力な商品となっていった。

豪商たちは、競って塩田開発に取り組むこととなった。尾道は、備後国大田荘の年貢米積出の公認港として港湾都市尾道の発展が始まるが、歌島や生口島などの島嶼部からの物産を扱うことによって大きく発展したといえる。その基幹物品が塩だったのである。

尾道地方の塩田を並べてみると、富浜塩田（尾道市向島町）、栗原塩田（尾道市天満町付近）、吉和塩田（尾道市新浜付近～正徳町、福地町付近）、生口塩田（尾道市瀬戸田町）がある。

尾道地方の塩田分布図



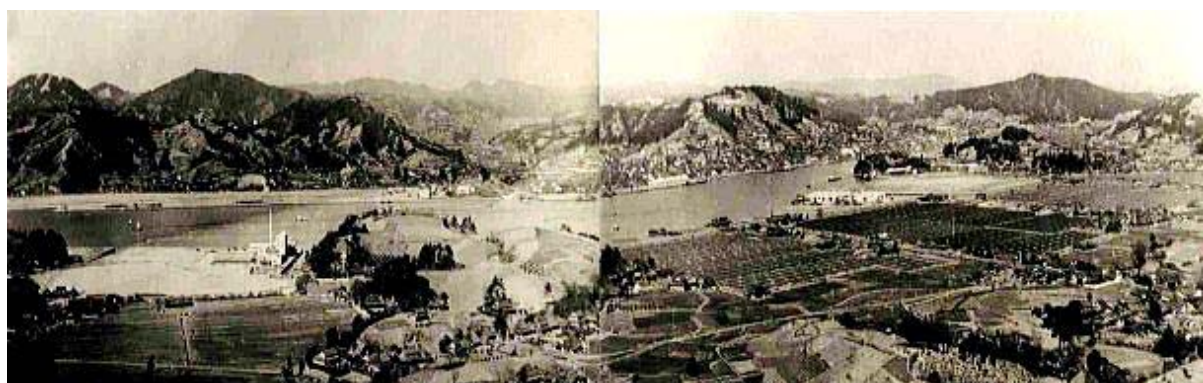
豆知識 この地図上の『浜』は塩田をあらわしている。
当時、塩田の地主は『浜旦那』、塩田で働く人は『浜子』と呼ばれていた。
郷土料理の浜子鍋は浜子たちが昔から好んで食べたことから名付けられた。

尾道地方の塩田開発の年代

藩別	浜 名	軒数	開 発 年 代
福 山 藩	山波（尾道市山波町）	1	1698（元禄11）年
	浦崎（尾道市浦崎町）	2	1715（正徳5）年
広 島 藩	生口古浜（尾道市瀬戸田町）	30	1670（寛文10）年～1683（天和3）年
	富浜古浜（尾道市向島町）	11	1677（延宝5）年
	栗原沖（尾道市天満町付近）	4	1688（元禄元）年
	肥浜（尾道市向東町）	8	1689（元禄2）年
	生口新浜（尾道市瀬戸田町）	7	1690（元禄3）年～1696（元禄9）年
	富浜新浜（尾道市向島町）	14	1691（元禄4）年
	天女浜（尾道市向東町）	11	1692（元禄5）年
	吉和古浜（尾道市古浜町付近）	8	1696（元禄9）年
	津部田浜（尾道市向島町）	2	1697（元禄10）年
	吉和新浜（尾道市新浜付近）	9	1703（元禄16）年
	小肥浜（尾道市向東町）	2	1730（享保15）年

富浜塩田遠景（土本壽美氏蔵）

1939（昭和14）年頃の富浜塩田（尾道市向島町）



塩の製造法の推移

古代の塩製造方法は、乾した海草を焼いて灰塩をつくる「藻塩焼き」が代表的である。やがて、灰塩に海水を注ぎ「かん水」(濃い塩水)をつくり「製塩土器」で煮詰めて塩をつくるようになった。

より効率的に「かん水」を得るために、海草から砂に代えて「かん水」をつくった。製塩土器に代わって、「塩釜」がつくられ大量の塩の生産ができるようになった。

中世に入ると、「かん水」を取る「採かん地」を作るようになり、「入浜(いりはま)」と「揚浜(あげはま)」がつくられた。「入浜」は、干満の差が大きい地域で干潟や内海、河口などで発達した。「揚浜」は、干満の差が少ない地域において人力で海水をくみ上げる方法で日本海や太平洋岸で発達した。

尾道地方の塩田は、当初揚浜式であったが、近世に入り、土木技術の発達に伴い、大規模な塩田開発によって開かれ、入浜式塩田となった。これは、より濃度の濃い塩水である「かん水」をつくり出し、釜で煮て塩を取り出すもので、広大な面積を必要とした。また、塩を含んだ砂を乾燥させるためにかなりの労力を要した。

近代には幕末にヨーロッパから、流下式塩田の技術が導入された。入浜式のものより、ポンプなどを使用して、10分の1の労力によりかん水をつくり出せるものとして効率のよい塩の採取が可能となった。その後、イオン交換膜による方法が開発され企業化されていった。

歌島左衛門二郎書状

歌島左衛門二郎宛書状(反故裏経紙背文書)

原本・鎌倉時代後期

原資料 厳島神社

かさねて申候、さて八又五郎八さきに
下り候とて、しをのせにを九百文とりて下
たりたるよし、たかいの二郎申候、それに□
けん／＼せさせ給へく候、又こんともいくら
とりてくたり候らん、それもけん□よ□
せさせさへ給へく候、又これに候ほと八つき
候てより八、これにてもの八かい候へ八
そのふんのようにとう八いり候ましく候、
ころへのために申候、又このほに
なり候て、しを八二百文にうり候よし
うけ給り候、このよし三郎左衛門
せうにおほせ候へく候
十二月廿四日 たうにん(花押)
さへもん二郎□□

京都にいたる道忍から歌島(尾道市向島町)の左衛門二郎に宛てた書状である。道忍は歌島公文の雑掌であったと考えられる人物で、京の市で塩が二百文で売られていることを伝え、早く塩を買い入れて送るよう伝えている。塩が重要な商品として流通し、在地の側が塩相場の動向に敏感であったことがわかる。

富浜塩田の作業風景
(昭和27年頃)
【土本壽美氏所蔵】

塩桶で海水を汲む浜子



手曳きによって砂をかく浜子



撒き砂をする浜子

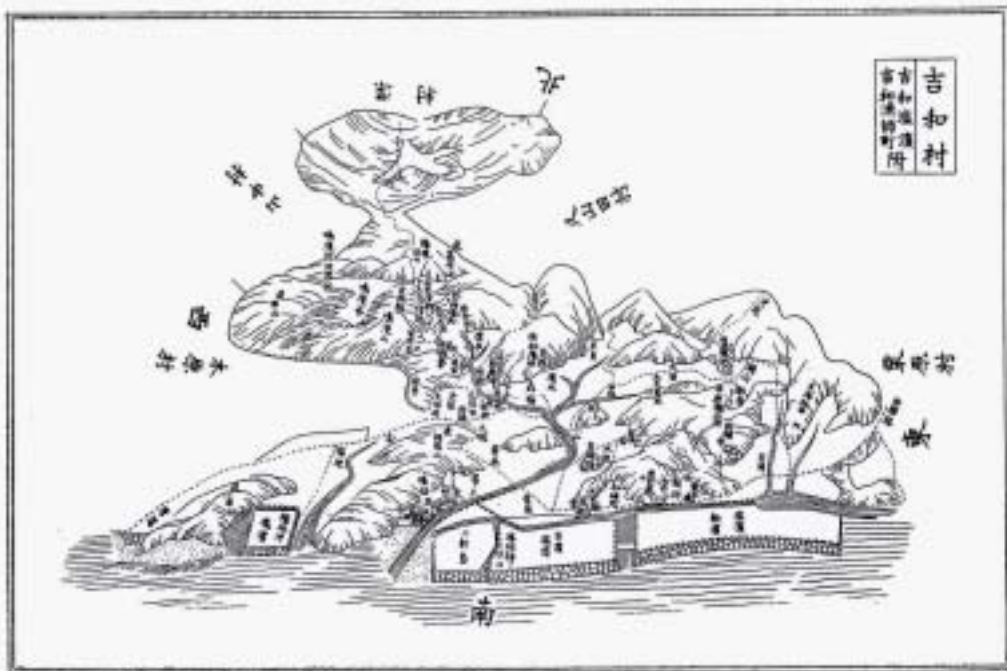
北前船の荷

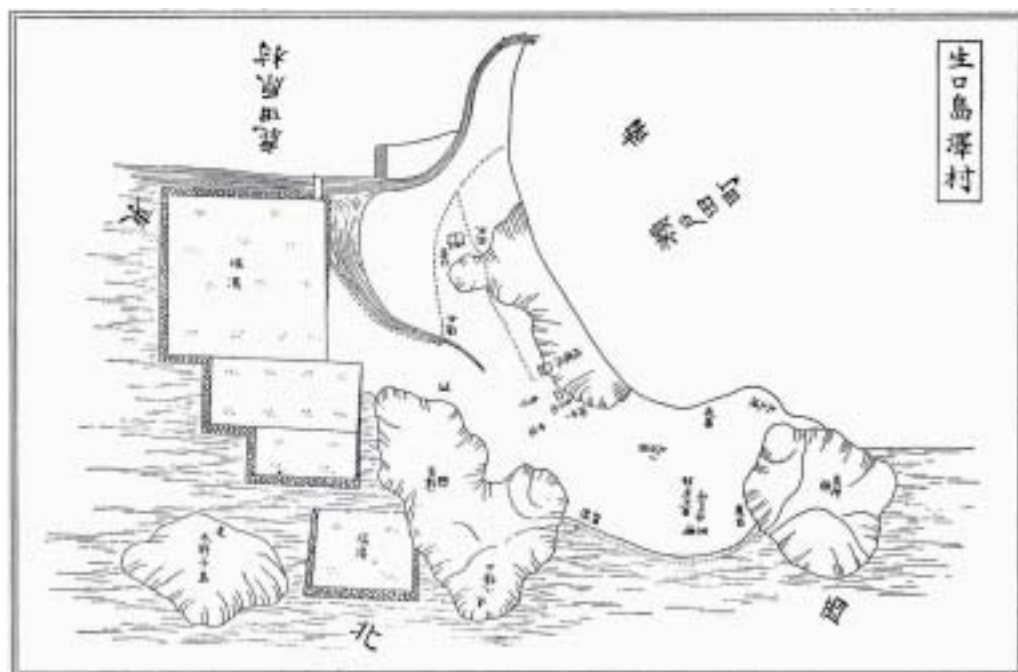
北前船の荷	
尾道でおろされた主な荷物	尾道で積み込まれた主な荷物
昆布 (北海道)	塩 (尾道市栗原町・向島町他)
鰯(ニシン)(北海道)	錨 (尾道市)
鮭(サケ)(北海道)	酢 (尾道市)
鰯(ブリ)(北陸)	綿 (尾道市山波町)
米 (北陸)	綿製品(尾道市山波町)
材木 (北陸)	古着 (尾道市)
肥料 (北陸)	畳表(備後表)(尾道市栗原町・美ノ郷町・福山市沼隈町)
	花崗岩の石(尾道市)
	石の加工品(尾道市)

芸藩通史にみる尾道地方の塩田

芸藩通史に掲載された栗原村（尾道市天満町など）、吉和村（尾道市新浜など）、向島東村（尾道市向東町）、生口島澤村（尾道市瀬戸田町）の地図。

芸藩通史は、広島藩の儒者であった頼杏坪らによって編纂された地誌。159 巻からなり、1818（文政元）年に着手され 1825（文政8）年に完成した。政治・経済・文化など多方面にわたり紹介している。地図が多いのも特徴である。





尾道と北前船

江戸幕府成立後、浅野氏が広島に移封され幕藩体制が強化されると、芸州藩領となった尾道では、それまでその繁栄に大きく貢献した渋谷氏（大西屋）・小川氏（笠岡屋）・葛西氏（泉屋）の「初期豪商」達が衰退していった。

寛文年間（1661～1673）幕府の命を受け河村瑞賢^{かわむらざういけん}によって西廻り航路が開発され、北国から日本海を通り、下関を廻って大坂（現在の大阪市）までの間を往来する北前船などの寄港が盛んになると尾道は港町としての活気を取り戻し、これで利益を得た新興商人達が台頭してきた。

下関と大坂の中間に位置する尾道は、北前船の頻繁な入港によって広島城下を凌ぐ繁栄をみせた。

江戸期の尾道は「芸州藩の台所」と呼ばれたが、その背景には北前船の存在が大きな影響を与えていたのである。

尾道の鉄産業

尾道において、中世の半ばに発生した刀鍛冶は武器産業として成り立っていた。

しかし、江戸時代になってひとまず平和が到来すると、幕府には政治的にも至上命題として、産業の形態を平和産業に転換し、生産力の増強を図らねばならなかった。そこで、かつての刀鍛冶は、鍛冶屋町（現在の尾道市十四日町付近）に密集して、鋤、鍬、庖丁、鎌、錨、釘など、今までの生産を急角度に転換した。

特に尾道製の錨は、大阪問屋を顧客（とくい）にして大阪での需要を大いに取り込み、時代を経て、発動機船の出現から、洋型汽船が現れるまで、四爪に開いた特徴を持つ尾道名産の錨として天下にその名を轟かせた。

錨産み出した鍛冶屋町



尾道市十四日元町にあった鍛冶屋町。
大きな錨が完成し記念写真を撮った
ものであろうか。
和洋錨製造の看板文字がみえる。



四爪錨（小型複製品）
尾道市教育委員会 所蔵

其阿弥【ごあみ】

其阿弥家は備後の作刀の祖とされる三原正家の系統を継ぐ刀鍛冶で、はじめは南北朝から室町時代にかけてと考えられている。其阿弥家の由来は、1719(享保4)年の「其阿弥清兵衛覚書」によれば、時宗の二祖真教上人【しんきょうしょうにん】が尾道で布教した際に、「御礼切小刀」を献上したところ「称美」(褒美)として「其阿弥」という法名を与えられ、以来家名としたと云われる。伝存する刀剣類の茎(なかご)の銘には「其阿弥」と「五阿弥」の二種が認められており、同一家か別家かは今のところ不明である。

其阿弥家の工房は、現在の十四日町辺りにあって、江戸時代に入ると刀鍛冶から農耕・海運用具を主に製作するようになったという。当時、この周辺には何軒もの鍛冶屋が軒を連ね、「鍛冶屋町」【かじやちょう】と呼ばれた。

其阿弥の代表作としては、備後一宮吉備津神社(福山市新市町)に奉納された「備州尾道五阿弥長行」の銘がある「毛抜形太刀」(重要文化財)【けぬきがたち】や「備州尾道住人其阿弥長行」の銘がある「刀」(尾道市重要文化財)などがある。



刀 一口
五阿弥貞信
銘：表「備州尾道住五阿弥貞信」
裏「明応九年八月日」
戦国時代 明応9年(1500)
尾道市教育委員会蔵



槍 一口
其阿弥國正
銘：表「尾道住其阿弥國正」
尾道市教育委員会蔵



鐐 一枚
銘：「五阿弥」
江戸時代
尾道市教育委員会蔵

「大鍛冶屋」坂井善兵衛肖像画（溝上豊太郎作）
【尾道市所蔵 坂井敬樹氏寄贈】



坂井善兵衛

1875（明治8）年尾道に生まれる。祖先は刀鍛冶、屋号を大鍛冶といい、明治中頃から錨鍛冶にかわった。尾道商工会議所第3代会頭や尾道市議会第19代議長を歴任、又風流人で、和歌・狂歌などをよくした。60歳を最後に一切の公職を辞し、1919（大正8）年から、私立尾道幼稚園の経営に専心携わった。

溝上豊太郎

1910（明治43）年尾道に生まれる。太平洋美術学校首席卒、春秋コンクール1位獲得。日本肖像画連盟顧問。川端画学校本郷研究所で指導。自画像を描いては洋画壇屈指の存在として知られ、ジョンソン（米大統領）、シュバイツァー博士（医師）、鳩山一郎（総理大臣）、岸信介（"）、池田勇人（"）、佐藤栄作（"）、松下幸之助（企業家）、横山大観（画家）、小林和作（"）、松本清張（小説家）など名士の肖像画を描いた。